The Japan Association of College English Teachers (JACET)

分野/Field：SLA

英検Can-doリストから見える「自信の変化」と英語学習の量と質について
― 依存型学習者から自立型学習者への一考察 ―

Change in learners' confidence levels seen in the EIKEN Can-do list and the relationship to quality and quantity when studying English

柳瀬 和明（財団法人 日本英語検定協会）
松平 知樹（財団法人 日本英語検定協会）

（財）日本英語検定協会は2万人を超える実用英語技能検定（以下、英検）の合格者に対する調査に基づいて「英検Can-doリスト」を2006年に公開した。このリストにおける能力記述文から、英検の合格者は級が上がるにつれて、自信を持っている対象が「自分自身の身近な事象（認知的負担が低）」から「社会性の高い事象（認知的負担が高）」への移行が読み取れる。

このような変化は準2級から見え始め、2級で顕著になる。この段階を「自立型学習者」、それ以前（3、4、5級）を「依存型学習者」と捉え、この段階移行の背景を英語学習時間と使用教材という観点から考察する。これらのデータは英検Can-doリストの最終調査と合わせて実施した「英検合格者の英語学習・英語使用状況調査」に基づく。

学習時間については5級から2級まで順当な増加が見られると同時に、準2級ではそれまでの増加傾向を上回る量の学習を行う集団が出始め、2級ではそれが「2極化」という形で顕在化する。使用教材においては、級が上がるにつれて指導者の存在が前提となる教材から指導者の存在を必ずしも前提としない教材への移行が起こる中で、準2級からその量的、質的変化が表面化してくる。

英語の学習履歴がますます多様化する中で、英語使用に対する自信の変化には様々な要因が複雑に関わっていると考えられ、英語学習時間と使用教材という観点だけを取り上げることは危うさを伴うが、自立型学習者を育成する上で具体的な目安として重要な手がかりになると思われる。

NII-Electronic Library Service